ぐつぐつぐつ……

みんなで食べるカレーはうまい！

このおかげで めっちゃいい天気

落ちちゃダメですよ、お姉さん……

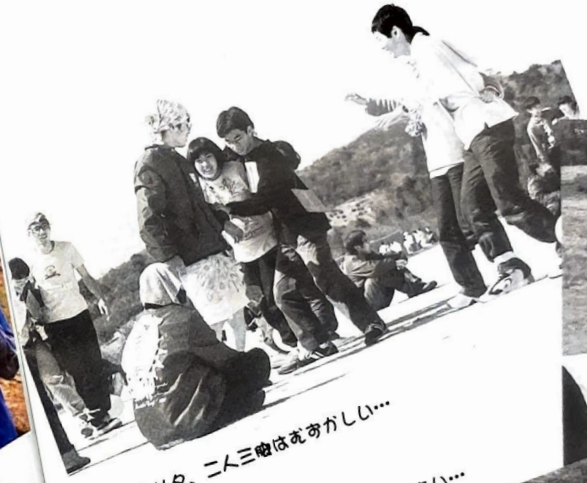
ろしくの印、
ォームファージの
瞬です。

ベストカップルラブ♡
寒鬱中

先生もメイク中

インディアンと
ツーショット

お嬢さん ミカンネット
いったいどうしたの…？



人間カルタ、二人三脚はむずかしい…

ドナルドー家のお

いい天気に鯉のじゅうたん… 弁当がうまい…

キン肉マンアミ

さて、やってまいりました。秋の訪れと共に飛翔55号をお届けします。

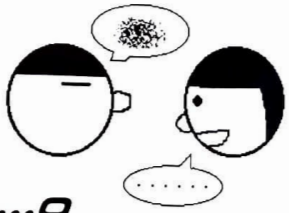
今号の目次（もくじ）

巻頭言 ……1

『寛容的抑圧の社会』――生和　秀敏　（総合科学部学部長）

特集1　人の間の関わり係（つな）がり……3

「寒いですね」「冷えますなあ」‥このやりとりをする二人の間にはすでに違和感が生じている。人間関係の不和は、こんな身近なところから始まるのかもしれない‥‥‥。



特集2　座談会　環境問題……9

広島大学が西条に移転したことをどう思いますか？西条ってどんなところなのでしょうか。あなたにとって刺激的ですか。

大学と町についてのおしゃべりです。

特集3　流されて大学生……13

30年前の学生と比べて今の学生はどのように変化しているのでしょうか。そしてその変化をどう受け止めているのでしょうか。学生の今と昔を探る、学生・教官の共同企画。

エッセイ～その1～……18

『デカイ街での小さなトラブル：前編』

甲田さん（教務係）のアメリカ旅行記。飛翔初の2号にまたがる長編エッセイ。自由の国アメリカでの珍道中を語る。いったい何が起こったのか!?

○○の部屋～研究室紹介～……21

総合科学部8コースの教官の研究室を訪ねてきました。
ちょっとのぞいてみましょう‥‥

エッセイ～その2～……29

『「平和な世界」と「世界の平和」』――村田　晃嗣（教官）
『虫愛づる教官』――宇佐美　広介（教官）
『フィリピン旅行記』――戸川　純子/武木田　千恵美/入交　洋彦（学生）

お初にお目にかかります～新任教官紹介～……33

今年の春から新任された11名の教官方の自己紹介文を写真と共に掲載。

人事異動のお知らせ……35

卒業論文紹介……37

アンケート結果のお知らせ……41

平成10年5月～6月に行った飛翔に関するアンケートの結果を発表します。
飛翔記事人気ランキングもあります。

読んでもらえるのが一番の報酬です。沢山の寄稿をお待ちしています。今回は教官、学生の2人の方に飛翔について書いていただきました。

読者からの声……42

編集委員のつぶやき～編集後記～……43

編集を終えて、彼らは何を感じているのだろう‥‥。
自分の好きなことを書きつづる自己満足のページである。

飛翔伝言板……45

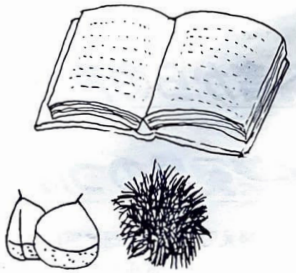
寛容的抑圧の社会

生和　秀敏（総合科学部学部長）

病理的行動の発生は，個人的条件もさることながら，個人を取り囲む社会文化的条件や環境の影響が大きい。人間の行動は，内的な欲求と外的な圧力の相対的な強さによって変化すると考えられている。外的な規制力が強まると，行動は抑圧され内向化され，不安やストレスは増大する。反対に，外的規制力が弱まり甘えが許されると，行動は外向化され，欲求に基づいた衝動的行動が頻繁に認められるようになる。しかし，現代という時代にあっては，衝動的行動と不安とが共存しているかのような印象を受ける。

それは，現代社会における人間関係の二面性に起因するところが大きい。子供たちに関していえば，仲間は心を許し合える友達であると同時に，一方では，気を許すことの出来ないライバルである。教師は，親しみの持てる先生であると同時に，管理者・評価者でもある。親に対する子供の気持ちも全く同様である。最後まで自分の味方になってくれる保護者であると同時に，期待という名の呪縛をかけてくる恐ろしい干渉者に映る。この点は，何も子供に限ったことではない。本当の味方は一体誰なのかが分からない。表向きの優しさの背後に容赦のない冷たさが潜んでいるような，いわば，寛容的抑圧の社会に現代人は生きているといってよい。

寛容さと抑圧の共存は，何も今に始まったことではない。いつの時代でも，程度の差こそあれ，両者は共存していると考えられる。自由の氾濫しているように見える現代において，一体，どれほどの抑圧的状況があるか疑問視する人もいるだろう。しかし，抑圧されているという実感は，周囲に寛容さを期待している程度が大きければ大きいほど，逆に，増大すると考えられる。甘えの世界に浸っている時間が長ければ長いほど，わずかな抑圧状況に置かれても，それを理不尽で耐えがたいと思う気持ちは強くなるのである。甘えの拡延している現代は，それだけ抑圧されたと強く実感する機会も増えているといえよう。



特集

御品書き

其ノ壱　人の間の関わり係（つな）がり

其ノ弐　座談会

其ノ参　流されて大学生

＊注①：ここからは特集のコーナーである。
心して読むべし・・・

＊注②：其の壱は人間関係の不協和について述べています。
まあ軽く覗いておくれ。

＊注③：其の弐は西条と大学について喋ってます。
読むなら早く。

＊注④：其の参は今と昔の学生像を比較しています。
あなたはどっち？

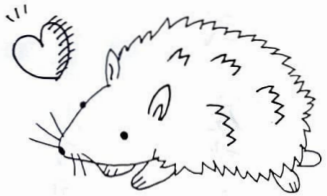
特集1

人の間の関わり係がり

～絡まり　もつれて　いじめとなる～

針が無いから分からない

人と人との間には適当な空間が必要なのだそうだ。例えばガラガラの電車でぴったりとくっついて座られたらちょっとおかしいと思うだろう。でも実際どれくらいの距離がちょうど良いか正確な数字は分からない。その点からだ中に針のあるハリネズミは互いの適当な感覚というものを心得ているそうだ。肉体的な面だけでなく精神的な面でもこれ然りである。あらゆる人間関係において自分にあわないと感じるタイプに距離を置きたく思ったり，好感の持てる人に近づきたく思ったりする。ところが前者のような思いを持っているのにその場から逃れられないとなるとなんと苦痛なことか！自分も苦痛だし，相手も苦痛だ。しかも相手が攻撃を仕掛けてくるとなるとなおさらである。職場での上司によるいじめ，学校での嫌がらせ・・・・特別なことではなく日常起こっている現象だ。一言でいじめといっても様々であり，軽々しく口にしてはいけないと思いつつも，学生の立場で考えてみた。大学という，一見人間関係が自由に見える環境においても例外ではないのだから。



それではいじめとはどんな現象なのだろうか。
まず最初にできるだけ経験や主観を交えずに考察してみよう。

記事の流れ

次ページから → 「いじめ」に対する考察 → ●いじめられる立場で / ●いじめる側の立場で / ●傍観者の立場で → 結びにかえて

いじめについての考察

ここでは，いじめについて少し距離を置いて見ていきたい。

まず**いじめの定義**について考えてみよう。いじめには様々なパターンがあるが，ここでは「他人からの無視・言葉・暴力等の攻撃を受け，それを受け手がいじめと認識した場合」としよう。

それでは**いじめが起こるメカニズム**について考えてみよう。定義から，初めに誰かの攻撃があってから発生していることがわかる。ということで，その攻撃発生の理由をいくつかの視点から見ていこう。

まず**攻撃する側**に注目して見てみよう。攻撃することの理由として，ただ単に攻撃すること自体に快楽を覚える人もいるが，多くの人がそれ以外の理由により突き動かされていると思う。その理由の一つとして「欲求不満による攻撃」が考えられる。これは，日頃自分が関わっている社会（家族・学校・職場などの集団形成された環境）において欲求不満やストレスがたまり，それを解消したいが故に攻撃を行うということだ。他の理由として，周囲からの圧力により攻撃を加えるというのも考えられる。例えば，「いじめる側にならないと自分がいじめられる」というケースなどがこれに当てはまる。他にもいろいろな理由が考えられる。

それではなぜある人が攻撃の目標になったのか，**攻撃される側**に注目して考えたい。目標となるのだから，その集団の中で特色のある人なのだろう。だが，その特異性がその集団で受け入れ難いものであったらどうだろう。そうなると，無理にいてもらうよりは出ていってもらう方がいいと考えるのが普通だ。そのために攻撃を加えられる，という羽目になる。これが目標となるだいたいの理由なのではないのだろうか。

次に**いじめの進行・促進**について周囲の人間に注目して見ていきたい。攻撃が行われ，いじめが発生したときの周りの反応はどうなのだろう。体験的にいって何もしないだろう。そう，黙っているのである。なぜだろう。理由の一つに「自分が動かなくても他に人がいるから」ということで責任を分散しているのではないのだろうか。他の理由として，いじめというのは悪いことだと思っているが，いじめられている人をその集団全体で排除したいという共通の考えがあって，心の中ではいじめている人を支持しているために黙っているというのも考えられる。

集団の中で特異性を持った人が攻撃の目標となる理由として，日本の教育理念の一つが影響しているように感じてしまう。今の日本の小中学校などでは「みんな同じように仲良く」という考えがある。このこと自体は立派だと思うのだが，考え方によっては，「みんなと違うようなものはよくない」というふうにも考えられてしまうこともある。それで，みんなとちょっと違う人をよくないやつだということで，そのグループから排除しようとするために，いじめが起こっているのではないだろうか。

もしそうなら，その異質な人を受け入れることはできないのだろうか。今の日本社会においては，その異質なものと関わっていかなければならない状況が少ないのが現実だ。だから，その異質なものを受け入れるトレーニングの機会が少なくなって，大きくなっても受け入れがスムーズにできないために，様々な問題が発生しているといえないだろうか。

※このページの執筆にあたり，浦　光博教官（生体行動科学コース）に御協力頂きました。

今度は「いじめられる側」「いじめる側」「傍観者」のそれぞれの視点から見ていこう。

いじめられる立場で

いじめが生じる時，それは信じていた友達を失う瞬間でもある。時にはいじめの事実よりむしろそれにショックを受けるかも知れない。

私が一時的ないじめを経験したのは中学生の時，原因は病気による外見の変化によるもので，明らかに不可抗力な理由だった。が，そうと知っていて態度の変わった友達は多くあからさまに接触を避けたり遠くからくすくす笑ったりする人もいた。しかしそれは，原因であった病気が治った途端ぴたりと止んだ。皆の態度も元通りになったのである。

これは私にとって非常に辛い経験であったが，多くの大切なことを学んだ。“苦しいときにこそ変わらず接してくれる人が真の友だ”と私は思う。それが私の心の支えだったからだ。普段は仲良く接していても，こちらが弱い立場になると離れていく・・・・そんな人々に，そして何より自分に負けたくなかったので，私は休まず学校に行き，原因である病気を治す最大限の努力をした。病気が治り，皆の態度も戻ったとき“自分に勝った”と思った。

いじめられたことを負い目に感じる必要はない。この経験は，人に対する思いやりの心を生む。そしていじめに限らず，困難を乗り越えたとき，人間は成長する。経験だけではなく，それを乗り越えることが重要なのだ。また，自分の心を分かってもらいたいという努力をしなければならない。そのときは通じなくとも，必ず後で報われるときが来ると思う。

以上のようにいじめられた経験は自分の成長のために役立つものであるといえる。が，だからといってここでは決していじめを認めていいと言いたいのではない。

最近ではいじめも随分注目されるようになり，以前よりも状況はほんの少しでも良くはなったのではないかと思う。しかしそれでもまだ“いじめられる方にもそれなりの原因があるのだから，どっちもどっちではないか”と人が言うのを聞いて情けなく思うことがある。この意見には“いじめは悪である”という基本的認識が欠けている。もちろん個々の状況によって考えられるべきことはあるだろう。私がいじめられたのは，気が弱すぎると言う（私にとっての）欠点があったからで，これは確かに私が治していかねばならないものだった。しかしそれが私をいじめて良い理由になるだろうか。なるわけがない。心から忠告してくれたり，勝手さを叱りつけたりするのならば分かる。だがそこで「いじめ」という手段が選択された時点で私は「いじめられる被害者」となった。

いじめはそれそのものが悪であり，望みもしないのにいじめ「られる」者は，少なくともいじめに関しては，原因を持つ責任を問われはしないと思う。いじめられる原因が治すことのできないものや，治す必要のないその人なりのものであるときはなおさらそうである。私は決していじめる人たちを責めろといっているのではない。ただいじめられる側も責任があるとして，いじめが悪であるという事実を隠して欲しくないだけである。

いじめる側の立場で

小学生の時，私を含むグループが一人の女子を笑いの種にしたことが始まりだった。その原因は整理整頓が苦手だった彼女の机。些細なことがきっかけで私達の彼女への陰口は益々エスカレートして，最後には身体的中傷にまで及んだ。

昔の私は確かに残酷だったが，それは人の心の痛みを全く分かっていなかった故の行為であった。一人前に陰口をたたくことはできても，その言葉で一体どれ程人が傷ついているのかわかるはずもなかったのだ。

人はイジメを含む様々な人間関係の問題を経て成長する。しかしそれが円滑に行われなかった人はどうなるのだろう。最近体に不釣り合いな未熟な心を持った大人が多いように思う。（あえて私達学生も大人という部類に加えておきたい。）自分が傷つけられた時はひどく敏感なのに，逆の立場に立つと人の痛みに対しては鈍感なのだ。思い当たる人が多いのではないか。心の痛みをわかるようになっても，その関心が自分にしか向いていないのでは意味がない。だが心が未熟なままであることを本人だけの責任にはしたくない。彼らを取り巻く環境にも一因があるはずだ。どこに責任があるかなんて追究しても仕方がないことではあるが，私達の今の環境を少しでも改善できれば，心の触角を周囲にのばす助けになると思う。

人の痛みに鈍感で，精神的に未熟な人間が増えているという指摘があったが，反対に，自分のふるまいに鈍感で，精神的に未熟な人もまた，増えているのではないだろうか。

自然と人が寄ってきて，いつも人に囲まれている人は，周りの空気が澄んでおり，反対に，人があまり寄りつかない人の周りの空気は濁っている……というたとえ話を本で読んだことがある。

私はわざと冷たく接したり，口を利かなかったりして人を避けたことが何度もある。そして「いじめられた」と言われたこともある。でもちょっと反論するなら「それはあなたの周りの空気が濁っているからだ」と言いたい。つまり，人から避けられるということは，自分の気付かないうちに有害物質をまき散らしているということだ。人によって耐えられる濃度は違うが，その飽和濃度を超えると，無視したりわざと避けたり，という行動に出てしまうのだと思う。だから，それらの行為が，「ちょっと避けとこう」ぐらいの段階のうちは，いじめというよりもむしろ有害物質遺漏の警報信号ととって欲しい。もちろん理不尽な，暴力的な差別行為は別として，あまりに多くの人に避けられたり，嫌われたりするようなら，周りをどうにかしようとするよりまず自分自身を省みる必要があると思う。

傍観者の立場で

小・中学校の頃，ただいじめを観ているだけだった私はいつも，「私はいじめていないから悪くない。」と思っていた。心の中ではいつもいじめを受けていた人をバカにする気持ちもあったが，敢えて表に出そうとはしなかった。いじめという悪いことはしたくなかったからだ。悪いことはわかっていても，止める勇気はなかった。ただ「自分は無関係」という態度をとって安心していた。だが，実は私も，いじめを黙認するという形でその人を傷つけていたのではないか。

今も私には「嫌なことには傍観者でいよう」という気持ちがあると思う。もしも今，近くでいじめが起きたら，また傍観者になってしまうかもしれない。そうならないためにはどうしたらいいだろう。まず，傍観者の自分もいじめられている人を傷つけていると認識する。そして，自分がいじめを止めようと動かなければ，誰も動かないと考える。いじめを止めるにはどうしたらよいだろう。いじめは大抵，集団が一人の欠点のみに注目してしまい，それを理由にその人を排除しようとして起きるものだと思う。その欠点を補うように行動し，その人の長所を見つけ，それを表に出す機会を作る。そうやっていじめられている人が，集団にうまく溶け込めるように助ける。そうすれば，いじめは消えていくのではないか。

次は傍観者への訴えを述べたい

今まで身近なところでいじめがなかったという人はほとんどいないだろう。私の周りでもいじめはあった。いじめられた経験もある。いじめられた時に感じたのは仲間外れにされる心細さだった。誰も声をかけてくれない。いじめにたった一人で対していかなければいけない。ひとりぼっちだという心細さが何よりも心を重く沈ませた。

いじめられる側にとって周りの人に見殺しにされるほど辛いことはない。周りに人間関係を絶ち切られて一人にされたと感じたとき，人はとても弱い存在になってしまう。人間はひとりじゃ生きていけないのだ。

だから，周りでいじめがあったとき，あなたに力を貸してほしい。いじめる側と闘ってほしいわけではない。ただ，そっとでいいからいじめられている人に声をかけてあげてほしい。言葉を二，三言交わすだけでいい。大切なのは，いじめられている人に，「自分はひとりじゃない」と感じてもらうことだ。人間は，ひとりじゃ生きていけない。だから，いじめがあったとき，いじめられた人をひとりにしないでほしい。

結びにかえて

人間はエゴを持つ存在である。故に他者を傷つけたり，
他者に傷つけられたり，傷つけ合うのを黙って見ていたりする。
そして，状況によりどの立場にもなりうる。

客観的に考えれば，不当に他者を傷つけたいと考える人間も，
他者に傷つけられたいと考える人間も少ないはずである。
ところが，多くの人間が感情や衝動に流されて客観的に自分を
省みることができない。
そしてそのことは，「いじめ」という単語から想像される
陰惨な人間関係に結びつきうる。

常に（感情や衝動に流されているときも），
自分に問いかけて欲しい。相手を不当に傷つけていないか，
自分が不当に傷つけられていないか，
目前の人達が不当に傷つけあっていないかを。

特集2

座談会

―環境問題―

1998.6.27開催
於：非常勤教官控え室

暇つぶし

「暇なときなんて，みんな広大のまわりでうろちょろしているからね。大学の中とかでね」
「もしくはどっかの家に行って麻雀とかしていたりするしね。」
「でも空きコマに麻雀はできないかも。」
「町中だったら2，3時間ぐらい時間があいてみたら，ちょっと歩いてどっかに遊びに行こうかという話になるんだけど。さすがにこの辺ですと，ちょっとどこかに行こうかという気が起こらない。」
「西条プラザ行こっかとか。」
「ハイパーマートに行こっかとか。」
「刺激が少ないのかなぁ。」

西条においてこのような話を聞くことは珍しくない。一方，(↗)

町の考え方

「どんなことを言ったって大学を，町の近いところに移せないわけでしょ。だから，あー何がない，これがない，しょうがないっていう文句の言い合いでいいわけ？それよりもその中からどういう物を作っていきたいっていう方が大事じゃないかな。今から大学が動くわけないのよ。」

と考える人もいる。

◇◇◇

このような西条の環境問題（自然環境ではない）について飛翔は座談会を開いてみた。

私達にとって何が刺激的であり，何が刺激的でないのか，また，それは自分にとって興味のあるものだけでしかないのか，興味のないものも刺激的なものになり得るのか，それが刺激的でないとしたら，どうやったら刺激的なものになり得るか。刺激的なものとそうでないものの差は何か。そして何より，***西条を刺激的な町と見ることは出来るか？***

この座談会の記事を読んで少しでもそのような問題を自分の頭で考えてくれたらと思う。

出席者一覧

司会　田村　久（外国語コース2年）
論者　日下部　眞一（自然環境研究コース助教授）
　　　有村　大士（物質生命科学コース3年）
　　　青松　伴晃（人間文化コース2年）
　　　前田　和寛（生体行動科学コース2年）
　　　江口　裕次郎（1年）
記録　杉野　茜（外国語コース2年）
　　　井上　真由美（外国語コース2年）
写真　大仲　慎二（1年）

・街への遠さ

青松「確かにみんなは都会が遠い遠いといっているけども他の大学の人だったら30分ぐらいかけて都会まで行こうという奴はいっぱいいるんだよね。ここではその30分の距離が遠く感じるっていうのが西条の環境の特殊さで，みんな西条にいるから遠くに出るのがめんどくさいっていうのがある。結局都会に30分なんていう場所なんていくらでもあるわけだけど，それをしないっていうのはその辺からだと思うわけよ。甘えているというのもあるんじゃないかな。」

有村「文句ばっかりいっているのは，確かではあるよね。他の大学とかと比べても，交通手段が限られている，人や乗り継ぎが多い，というのもやっぱり手近な原因ですよね。車になってかなり楽ですけど，前だったら市内に出るのに夜でも片道2時間もかけて行ってましたから，その時間とかを考えるとやっぱり，家にいて何かやった方がいいんじゃないかと考えることが多くなる。そういう所が厳しいですね。」

・交流と情報発信

日下部「問題は，交流ですよね。交流と情報の収集発信，それが非常に大切な気がする。それについては君達の動きで補っていける面が結構あるんじゃないかなとは思うんだけどね。もちろん大学側とか，市の行政とかそういう所のバックアップがあれば非常に良いとは思うんだけどね。学生達でなんか集まってわいわいやるような所があればいいんだろうけど。例えば，全国的に流行っているらしいあの・・・サロンティー，新聞にこの間載っていたけどあっちこっちでサロンがね，それは幅広い年齢層の人達が集まってお茶飲みながらいろんな議論をする所でね，そういうのが流行らしいね。」

江口「学生同士だけじゃなくて，年輩の方々とか，世代を越えて議論が出来たら面白いでしょうね。」

日下部「だから，そういうものが西条の町の中で一カ所でもあったら，それで学生だけじゃなくて少ないながらも世代の違った人達がね，入り込んで一緒に話せるものが出来たらと，3,4年前から気にはしているんだけどね。それともう1つはあの，インターネットや電子メールを使って，君達の持っている情報を発信することですね。」

有村「そうですね，最近僕のホームページは更新してないんですけど，電子メールとかはパソコンを持ち運べるようにしたおかげでどこででもやろうと思えば出来るしそれはいいですね。」

田村「そういうことをすることで物理的な遠さを克服出来るかも知れませんね。」

有村「そうですね，海外の人とかとつきあう機会があったら電子メールを交換すると，お互いいいと思う。」

西条にもあるサロン!?

なんと西条にも市民と学生の交流からなるサロンのようなものがあった。詳しくはホームページがあったのでそこをご覧あれ。
http://www.potato.or.jp/~hirac/etcetra/etcetra.htm

・外国と西条

有村「学生って言うのは，特に総科の学生はもっと外国を見ていない？自分の周りの人を見たら，町とかでもつながるのに，それよりももっと外の世界に目が向いているんじゃないかな。」

日下部「総科の人が？」

有村「海外に行く人が，結構多いんじゃないかなと思うんですが。だから西条でサロンを作っても，限定された人しか行かないんではないかと。広島市内と比べても，世界の人と接するといったことの方が刺激は多いですから。だからみんなで話をしようと思っても，西条だと明らかに学生が多くなるのが分かるし，学生に刺激としてあるものが少ないと思って，西条でつながりを持つよりも外側に目がいっていると思う。」

・ボーリング論争

日下部「外側だけじゃなくて，西条という町に刺激が欲しいということだよね。」

有村「具体的にどうすればいいかってことが頭に浮かんでこないから，身近な娯楽施設がないとか，漠然的に刺激が足りないってことを考えてる。どれだけ刺激があっても足りないと感じるのかもしれないけど。西条っていう環境は刺激という面から見てどうなんでしょうかね。」

青松「身近なところに映画館とかできれば。そういうところからつくってもらえればこんなに刺激がないとかいう文句はないのに。学生から言ったら，もっと身近なところから変えていって欲しい。」

有村「でも娯楽って言う刺激は映画館は別かも知れないけど，例えばボーリングとかだったら・・・それだけで終わってしまう。」

青松「でも娯楽的なところから，心のゆとりが生まれると思うし。ボーリングやりゃあ他のことに目が向けられるってわけじゃないけど。単純に考えると土壌がないっていう事だと思うから，そういうところからでも。」

有村「ボーリングをすることがあっても，どう変わるってもんでも。」

青松「ボーリングってのは必要だよ，そういうところからでも，西条にもある程度文化水準があるって分かれば社会の目も西条に向かってくるんじゃないかな？」

・21世紀に向けての体験教育

日下部「僕はもう50近いからね，僕はもうちょっとしたら死ぬから良いけども，君達はあと50年くらい生きていくわけです。21世紀の前半くらいは，君達は自分自身の絶頂期を，日本で過ごすわけです。だからその中で様々な都市問題，過疎問題を否が応でも扱っていくわけです。本当に住み良い社会を築いていけるかということを，大学という所で視野に入れて学問をしていかないといけない。」

青松「2,30年後を考えると，素晴らしいことかもしれませんが，ごく個人的なレベルで考えてみれば，実際問題として刺激は足りないんじゃないかと思うんですが。」

日下部「もちろん非常にわかります。だから個人的なところと，世界の広がりというのを，結びつけることが出来なくなっているのですね。だからそれらを結びつける教育が，日本に求められてくると思う。」

有村「それだったら，体験型の授業じゃないと，社会に対しての目は開けられにくいですね。刺激とかを実際に感じることができないと難しいですね。」

日下部「僕もそういう批判はしているんだけど，どんなふうに解決していったらよいかというところが難しいところです。そういうことを考えると，もうちょっと違った面からでも広島大学の位置にしてもね，考えられるような気がする。」

青松「それでも，基本的に娯楽施設は少ないんですよね。」

日下部「そうです。だから，例えば極端なこと言えば，4年間は遊ぶなっていうことよ。4年間は遊ばずに，どこかの農家にでも住み込みにいって，仕事をして，汗水流しなさいと，そういうことですよ。晴れたら大学行って勉強しなさいと。」

・西条にもある国際交流

田村「社会の関係といった観点からどんなことができますか？今いわれた農家に住み込みとか以外に。」

青松「例えば，社会人と同じ組織に入れば交流しやすくなるかもしれないけど，西条にあります？組織やボランティアみたいなものが。」

有村「会はありますね。学生の団体が知らないような会は沢山あります。」

青松「でも西条の人たちが，学生をどう思っているかっていうのが全然わかんないし。」

田村「それは絶対最初っから分かりようのないことだから。」

有村「そういう会とかがあれば，ぜったい若手やいろんなことを考えられる大学時代を過ごしている我々というのは，入ってきてもらいたい存在でしょうね。」

日下部「学生は西条に住んでいる人達にとってみれば，来て欲しい存在だと思うよ。そのような会でも手伝って欲しい面もあるし。昨日も，国際プラザで，開発教育の研究会を始めようっていって，そのプログラムを考えてたんだけれども，学生諸君に入ってきてもらって，事務局の運営とかをやってもらったらいいね，っていう話が出たんですけどね。」

国際プラザについて

国際プラザとは広島中央サイエンスパーク内にある国際交流のための施設。NGO活動の支援や在日外国人のための研修等を行っている

・ネットワークの構築

田村「地域の人も，大学は来てしまったのだから絶対に学生のことをいやがれないと思うのですが」

日下部「一応東広島市としても，学園都市を掲げてる以上は，広大の存在とか，否定できませんよ。そして人・物をどんなふうに有効活用して，元気な町にしていくかってことですね。」

前田「ただ実際それが行動としてでてきているかということに関しては，最初の歩き出す一歩が問題となってきますね。」

有村「一歩っていうよりも，お互いそこそこやっている人がいて，学生の中でも，社会と話したい人がいるけど，お互いに相手にいかに情報を伝えるかとか，どうやって相手に興味を持ってもらうかっていうところで，まだ試行段階にある。」

日下部「だからまだネットワークが繋がってない。どうしていったらいいと思う？」

有村「そうですね。もうちょっとするとみんなパソコン持ちだして，誰かホームページをもっと自主的につくれば・・・」

日下部「だから，そういう方向をつくれば，あともうそこにパソコンさえ来ればすぐ簡単に今日か明日でもできるよ。」

有村「結構好きでE-mailしている人もいるし，ホームページ作っている人もいるから。グループで一人出すみたいにして，学生がホームページつくって学校の情報を管理させるような所を作ると面白いかもね。」

日下部「それはあるね。だけどそういうものは自発的じゃないと学生にとって意味がない。」

有村「だけど学生は自分が犠牲になるという事を望まないだろうし。」

日下部「だから結局するかしないかじゃなくって，誰がやりだすかどうかだろうね。」

前田「全体の問題意識じゃないでしょうかね。」

日下部「例えば2年生や3年生あたりが率先して新入生に対して，おい，インターネットやろうってな感じで土曜日でも日曜日でも情報処理センターが閉まっていたら，僕みたいな先生を使って，自由にやるとかね。」

有村「そういうことがあっても良いですけど，ないということにもっと危機感を持つべきではと。ちょっとは思う人もいるとは思うんですよ，でも相手が大きかったり時間がかかったりすると，学生は遠慮してしまうと思うんですよね。例えば，教える人にちょっとバイト代出してみるとかすれば人が集まるかもしれませんね。」

日下部「こっちから手取り足取りしたんじゃ動かないんじゃないかな。」

有村「というか，みんなの意識理由が，個人というものになってきているんですよ，だから自分にとってというように考える，自分の時間を考えてしまうとやっぱりバイト等を優先しちゃいますね。」

日下部「だからさっきの僕の話，出発点だね。他人と繋がった活動をする，個人の時間はそれはあくまでも個人の時間だけれど，逆にいうと個人の時間っていうのは他人の時間でもあるしね。」

有村「だから実際やってみれば気付くと思う。だからどうそれを引き戻すか。そっちの方に逃げていく学生達をどう引き戻していくかをもっと考えないと。バイト代出してみるとかでも。」

これにて座談会は終了。

これを読んであなたは何を考えたか。それが一番重要なことだ。自分で様々な刺激を見つけていって欲しい。もしそれがなければ創り出せばいい。一人一人が刺激的だと思えればそこからでもこの環境は刺激的になるはずである。